



北海道ポーランド文化協会誌
2020.5.20



発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com

東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058



2020

7.18 (土) → 7.26 (日)

8:45-22:00 【入場無料】

札幌エルプラザ
(北 8 西 3)

1903(明治 36)年 7 月上旬～9 月 19 日、ロシア帝室地理協会の委嘱による調査団(ブロニスワフ・ピウスツキら 3 名)が北海道アイヌの調査を行いました。約一週間にわたり滞在した平取コタンでは、地域の撮影や聞き取りを行ったほか、多くのアイヌ民具やアイヌ語音声を集めています。本展示ではこれら貴重な成果と合わせて、地域住民との出会いや交流を紹介し、明治後半代の平取の姿を来館者と共有します。

また、2018 年にはポーランドのジョルイ市博物館とクラクフの日本美術技術博物館“マンガ”館で B・ピウスツキに関する展示会が開催され、本館が協力しました。そうした近年の国際交流の動向も紹介し、ピウスツキが没後 100 年にもたらした縁と今後に生かすべき教訓を考える機会にもします。

川越宗一著『熱源』(直木賞 2020.1)でも取り上げられ話題になったポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキと日高管内平取町のアイヌコタンの関わりを紹介します

《第 95 回例会》

パネル展と 講演会と 上映会&座談会

平取町立二風谷アイヌ文化博物館 第 25 回特別展

1903 年夏の平取 ～B・ピウスツキたちの短期調査より～ 移動展 in 札幌

- ①《パネル展》2F 交流広場、2020 年 7 月 18 日(土)～26 日(日) 8:45～22:00、申込み不要
- ②《講演会》「ブロニスワフ・ピウスツキってどんな人?」新井藤子(B・ピウスツキ研究、博物館学)「移動展 in 札幌の見どころ」長田佳宏(二風谷アイヌ文化博物館学芸員)カムイユカラ(神謡)「カケスとカラス」披露: 貝澤ユリ子(平取町二風谷アイヌ語教室)、4F 研修室 3、7 月 18 日(土) 13:30～15:30、定員先着 15 名(申込み必須)
- ③《上映会&座談会》(1)ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』2016 ヴアルデマル・チェホフスキ監督 53 分 (2)座談会「ブロニスワフ・ピウスツキ人物伝～史実とフィクションが伝えること」(司会)新井藤子(発言)井上紘一ほか、4F 大研修室 AB、7 月 24 日(金・祝) 14:00～16:30、定員先着 30 名(申込み必須)

申込み先 (②③に参加ご希望の方は氏名・連絡先を→安藤へ)

080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

※会場が休館となる場合は、延期または中止となります。

共催: 当協会, 平取町立二風谷アイヌ文化博物館, ポーランド広報文化センター



共催 / 北海道ポーランド文化協会、平取町立二風谷アイヌ文化博物館
ポーランド広報文化センター



《第95回例会》 二風谷アイヌ文化博物館移動展 in 札幌を終えて

平取町立二風谷アイヌ文化博物館の札幌移動展が、コロナ禍の下で、無事終了しました。

移動展明るく閉会

新井 藤子

〈パネル展〉2020/7/18-26, 入場(記帳)者約100人
 昨秋の同館特別展(2019/10/1-12/3)に基づき、1903年夏に北海道アイヌ民族調査に訪れた、ポーランド人ヴァツワフ・シェロシェフスキ、ブロニスワフ・ピウスツキ、樺太アイヌの通訳千徳太郎治からなる調査団が、平取で行った調査の成果を、平村ペンリウク、ジョン・パッチェラー、野村シバンラムなど、ゆかりの人物らも交えて紹介した。

また、ピウスツキ没後100年イベントの縁をもとに、同調査の成果を現代の視点で読み解き直し、それを今後どのように活かしてゆくかを考えつづけるという同館の方針と、アイヌ資料を通じた海外の博物館との国際交流の進展も伝えている。

昨秋の特別展では、パネル展示のほか、蠟管資料や民具も展示された。平取調査を直接知ることのできる資料は、実際には行政文書や学術・文学書、手記などの文章記録がほとんどだ。アイヌの声を収めた蠟管音声は、レプリカや再生機とともに北大総合博物館に、民具はほぼロシアの博物館に収蔵されている。その中から平取調査で採録・収集されたものを特定することは、未だできない。

そこで二風谷アイヌ文化博物館学芸員の長田佳宏氏は、同調査団採録・収集の資料について、平取資料である可能性を提示する形で展示をした。音声資料では、現在沙流地方で継承されている歌謡との共通点を、何度も細かく聴き取り、似ていると判断した蠟管音声を会場に流した。

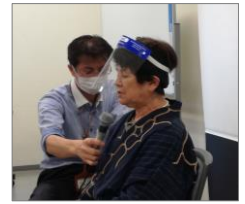
民具については、ロシアと二風谷の資料の形状や文様を丹念に見比べ同定し、非破壊検査や分析により製作技法を割り出し、工芸師・貝澤守氏がマキリの再現製作を試みた。マキリとともにその工程を展示し、再現により知り得た技法を現代の製作に応用するという継承の流れも作った。そのほか、撮影者や年代の異なる風景写真資料とも比較し、当時の平取コタンの区画や、その変容を明らかにした。

パネル展示は、写真のインパクトが強く、アンケート結果(60枚超)にも、当時のアイヌの女性の様子を伝える写真に特に心を動かされたという回答が多い。正装や、装身具をつけたいで立ち、逆に綻びのある服を纏っていても、表情には安心感が漂う。民族学調査という行為にも、ピウスツキが最大限の愛情をアイヌに向けた様子は、間違いなく

写っている。人物らは個性や尊厳を失っていない。

〈講演会〉7/18, 参加者15人

長田氏が、これらの写真の中で身元が明らかになった人物を紹介した。また、二風谷アイヌ語教室の貝澤ユリ子氏と来場者が一緒に神謡を謡ってみるといふ、小さな伝承が実現した。



〈上映会&座談会〉7/24, 参加者約40人

ドキュメンタリー映画を鑑賞。座談会では、井上絃一北大名誉教授=写真右=、森岡健治アイヌ文化博物館長、詩人の花崎皋平氏、『ロウ管の歌』著者・先川信一郎氏=写真左=、太郎治の遠縁の本田和義



・今昇両氏、『トナカイ王』訳者・小山内道子氏、平取町議・井澤敏郎氏、樺太史研究家の尾形芳秀氏、当会運営委員の松山敏氏らから、思い思いのご発言をいただいた。

当初は『熱源』を軸に、史実とフィクションのあり方を語り合う流れだったが、次第に話は蠟管再生秘話など、実際に起こったことに集中した。

映画についても、ピウスツキの調査年代や地域とはかけ離れたアイヌの映像が多用されている、という指摘があった。時を隔てたことで不明になった事柄を表すのに、イメージの力を借り過ぎると、史実とフィクションの境目が曖昧になる。これを断固として否定し、区別する力もあれば、「別にいいじゃん」と受け容れる空気もある。ともあれ会は盛り上がった。

終了後、早くも座談会続編開催へのご要望をいただいた。10月には、千歳高校放送局のみなさんが、ピウスツキを扱った5分の映像を発表されるという。楽しみだ。時間配分でみなさまに大変ご迷惑をお掛けしてしまっただが、明るく閉会できたことに、心よりお礼を申し上げたい。(あらい・ふじこ)

感銘を受けた映画

先川 信一郎

〈パネル展〉と〈上映会&座談会〉に参加しました。ポーランドファンの一員として、ドキュメンタリー映画「ピウスツキ・ブロニスワフ〜流刑囚、民族学者、英雄」には、あらためて感銘を受けました。

映画は、ヴァルデマル・チェホフスキ監督が、

2016年に制作したものです。ポーランド人の視点から、ピウスツキの波乱に満ちた生涯に光を当て、樺太アイヌとその文化について、あたたかい眼差しを向けた内容でした。映画の冒頭、ピウスツキの弟ユゼフの曾孫で、民族学者のダヌタ・オニシュキェヴィチさんが、帝政ロシア時代にピウスツキがサハリンに流刑となった経緯や、樺太アイヌやニヴフ、オロッコの人たちとの交流について淡々と語ります。

続いてピウスツキの妹の孫のヴァイトルト・コヴァルスキさんや、歴史学者のクシシュトフ・ヤブウォンカさんが登場し、ブロニスワフとユゼフの兄弟の絆、リトアニアでの生い立ち、1887年にサハリンから父に宛てた手紙を紹介し、彼の心情に迫っていきます。そして現在に至り、アダム・ミツキェヴィチ大学のアルフレッド・F・マイェヴィチ名誉教授と井上紘一北大名誉教授が、日本とポーランド両国の学術協力により、ピウスツキ研究が一段と進んだことを明らかにしました。

当時のポーランドは、ロシア、オーストリア、プロイセンの3国に分割され、第一次大戦後までの123年間、世界地図上から消えていました。それゆえに、ポーランド人としてのアイデンティティを持ち続けた、彼の業績を掘り起こそうという、チェホスキ監督の熱い思いが伝わってきました。

この後の座談会では、直木賞受賞作の『熱源』について、活発な意見交換がありました。著者の川越宗一さんは、北海道新聞(2020/7/31)のインタビューで「虚構混じりの小説という手法自体が、事実そのも

のを伝えるには不向きです」、「虚構と事実を等価に扱って、そのテーマに向かって書いていくのが小説なんだろうと思います」と述べています。

私個人は、この小説からは「汗のにおいがしない」という感想を持っています。仮に著者がサハリンの極寒を体験し、ポーランドを訪れ、アイヌの人たちと深く交流していれば、内容はもっと違っていたのではないのでしょうか。

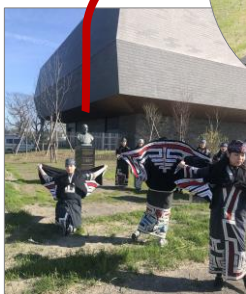
これとは対照的に、アイヌ民族に詳しい哲学者の花崎皋平さん=写真右=の著作『チュサンマとピウスツキとトミの物語 他』(2018)には、ぐいぐいと引き込まれる迫力がありました。鮭やフレップ(野イチゴ)に恵まれ、「何が欲しいとも何が食べたいとも思わずに、ゆったりと過ごす暮らしでした」との記述には、長編詩とともに共感を覚えました。

ところで、会場の様子を千歳高校放送局の女子生徒2人が、取材していました。年配者が多い中で、ポーランド的な表現をするならば、まさに「花が咲いたよう」でした。若い世代が、こういう機会に日本とポーランドを結ぶ歴史を学んでくれることは、嬉しい限りです。

(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授)



↑ 2020/7/30



B・ピウスツキ 102年忌〜ウポポイ National Ainu Museum & Park のピウスツキ像前で、職員がアイヌ古式舞踊を奉納しました。オンカミ(拝礼)のあと「鶴の踊り」と「刀の踊り」を披露しました。(5/15)

ウポポイ (民族共生象徴空間) 開業 ブロニスワフ・ピウスツキ 記念像の再披露



パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使が、白老町旧社台小学校で一時保管中のブロニスワフ・ピウスツキ像を訪問しました。(2/3)

新型コロナウイルス禍で開業が遅れていた、白老町のウポポイが開業しました。(7/12) 開業に先立ち、記念式典が行われました。(7/11) かねて式典参加を希望していた、ポーランド関係者の参加は叶わず、残念。(安藤厚)

=写真提供=駐日ポーランド大使館/野本正博/尾形芳秀/松山敏